

# 徒然草『丹波に出雲といふ所あり』定期テスト対策問題 | 現代語訳・文法・内容の 頻出設問と解答 解答・解説

---

問1 基本形「り」・完了（～た。存続「～てある」も可）・終止形。「り」はサ変の未然形・四段の已然形に接続する（「サ未四已」）。ここは四段動詞「造る」の已然形「造れ」に付いている。「立派に造ってある」の意。

問2 「いふ」。係助詞「か」（「とかや」の「か」）の結びとなるはずの語が省略されたもので、「結びの省略」と呼ぶ。「しだの某とかや（いふ人の）治めている所」ということ。

問3 「さあ、いらっしゃい」。「いざ」＝さあ（誘いの感動詞）、「給へ」＝尊敬の本動詞（おいでになる、の意の慣用的な言い方）。

問4 ぼたもち（おはぎ）の類。「かいもちひ」は『宇治拾遺物語』の「児のそら寝」でも出てくる重要語。

問5 「召す」＝「食ふ」の尊敬語（召し上がる）。「せ」＝使役の助動詞「す」の未然形（直後に尊敬語が続かないので使役と判断する）。「ん」＝意志の助動詞「む」の終止形（文末なので推量・意志・勧誘のうち、主語が話し手で意志）。訳「（皆さんに）召し上がらせましょう（＝ごちそうしましょう）。」

問6 ここでは「たいそう・並々でなく」（程度がはなはだしい）。本来は、神聖で恐れ多く、触れてはばかられる、の意（よい意味にも悪い意味にも使う）。

問7 読み「しん」・意味「信仰心」。「信おこしたり」＝信仰心を起こした。

問8 読み「うしろさま」・意味「後ろ向きに」。「さま（様）」は方向を表す。

問9 ふつうは社殿の前で対が互いに向かい合う形（正面側を向く形）で据えられている。ところが本文では、互いに背を向け合って後ろ向きに立っていた。この異常な置かれ方を、上人は深い由緒と思い込んだ。

問10 「感動して・感心して」。めったにない立ち方に心を動かされた、ということ。

問11 訳「ああ、すばらしいなあ。」「めでたし」＝すばらしい・立派だ（動詞「めづ（愛づ）」＋「甚し（いたし）」から）。「あな」＝ああ（感動詞）、「や」＝詠嘆。

問12 「ん」＝推量（～だろう）。訳「きっと深いわけがあるのだろう。」（「故」＝理由・由緒・いわれ）

問13 もとの語＝「見とがむ」（見て気に留める・見て不審に思う）。「御覧じとがむ」はその尊敬語。「や」＝文末に用いられた係助詞で、疑問を表す。訳「（この）すばらしいことを、お見とがめにならないのですか（お気づきにならないのですか）。」

問14 「言いようもなくひどい・あんまりだ」。すばらしい立ち方に気づかない同行者たちを、上人がなじった言葉。

問15 「つと」＝土産。訳「都への土産話に語ろう。」

問16 「ゆかし」＝心が引かれて、見たい・聞きたい・知りたい。ここで上人は、獅子・狛犬が後ろ向きに立てられている理由（由緒・いわれ）を知りたいと思った。

問17 「年配で思慮分別がありそうだ・大人びて落ち着いている」。現代語の「静かだ」の意味ではない。「おとなし」は「大人」が形容詞化した語。

問18 「ぬ」＝強意（確述）の助動詞「ぬ」の終止形。「べき」＝推量の助動詞「べし」の連体形（終止形接続なので「ぬ」の下に付く）。「つ・ぬ」は直後に「む・べし」など推量系の語が来ると強意となり、「ぬべし」で「きっと～にちがいない・いかにも～そうだ」の意。

問19 「いかにも物を知っていそうな顔をした神官」。

問20 「承る」＝「聞く」（受く）の謙譲語（お聞きする・うかがう）。「ばや」＝自己の願望を表す終助詞（未然形に接続）。訳「少しお聞きしたいものです。」

問21 基本形「る」・尊敬。受身・自発・可能では文意が通らず、ここは神官に質問した聖海上人の動作「言ふ」に対する、作者からの軽い敬意と判断できる（「る・らる」の尊敬用法）。

問22 「いたずらだ・たちが悪い」。「さがなき童べども」＝いたずらな子どもたち。

問23 「す（する・行う）」の謙譲語で、「いたす」の意。「さがなき童べどものつかまつりける」＝いたずらな子どもたちがいたしましたことで。神官が聞き手（上人）の前でへりくだって言っている。

問24 丁寧語（補助動詞）。話し手の神官から、聞き手の聖海上人への敬意（会話文中の丁寧語は聞き手への敬意）。

問25 「いたづらなり」＝むだだ・むなし。訳「上人の感動の涙はむだになってしまった。」（「に」＝完了「ぬ」の連用形、「けり」＝過去）

問26 獅子・狛犬が後ろ向きだったのは、深い由緒があるどころか、いたずらな子どもたちの仕業にすぎず、神官があっさり元どおりに据え直して行ってしまったから。ありがたい意味を見出して流した涙の前提そのものが崩れてしまった。

問27 （例）何でもないことに深い意味があるはずだと思い込み、ひとりで感動して涙ぐみ、同行者にまで同意を求める態度。もっともらしく物事を解釈したがる知ったかぶり・思い込みのこっけいさを描いている。

問28 作者＝兼好法師（吉田兼好・卜部兼好）／成立＝鎌倉時代末期／ジャンル＝随筆。三大随筆の残り二つは『枕草子』（清少納言）と『方丈記』（鴨長明）。